

カルペ・デイエム

坂口立考

カルペ・デイエム。ホラテイウスの詩にあるこのことばは、今日を楽しめ、今を生きよ、という意味で知られている。だが私には、もっと直裁で、明快なアドバイスのように聞こえる。ラテン語の原文は「後のことを考えるのは最小限にして、今日を摘め」である。花に見立てた一日を愛でるといよりも、摘めという強い促しを感じる。それは「今日を切り取れ」という意味だと思ふ。ふつう、何もしないでもきのうは今日になり、今日は明日になる、という途切れのない流れを思い浮かべるものだが、それは自分の時間ではない。自分の内側にはつきりと、今日を切り取る姿勢を持つことで初めて、一日が区切られる。今日が区切られ夢になり、夢もまた区切られて新しい今日になる。今日を際立たせる行いの中に、今を生きる実感の生まれる場ができる。実感の切り取りがカルペ・デイエムだ。

三年前、私は「アボット」を書いた。心の鏡になる存在と生命感に満ちた不思議な力。アボットをそっと手のひらにのせたい、と。二年前、「マインドトレイル」に「この世にまだ存在しない、ものとしくみをつくるフロンティアに向かって歩く」という決意を銘記した。千里の道も、進む一歩一歩

を数えることができれば必ず到達だろう。ただし、湧き上がる創作意欲を着実な足取りに換える環境と、自らの意思で選んだ道の意味を確かめる方法が必要だ。創業の時、アボットとの道のりを共にしたい、ということばで、踏み出した一步を重ねていく力を分けてくれたのはエ君である。「むずかしいかもしれないけれど、できたらすごい。これはやらないといけませんね。」共感が意味をつくり、意味が意思をつくる。この時私は、時計以外にも人生を刻む方法があることを予感した。実感を数える単位をつくろう。心の場を刻み、切り取り、それを映し出す。そして後からたどれるように。アボットという存在をつくることによって、心の場の生まれるきっかけができる。そのひとつひとつをつかり捉えてつなげてみたい。その方法は、今日という日の、丹念な仕事量の中に探すしかない。実感も探求の時間も多ければ多いほどよい。カルペ・デイムでいこう。

存在とは、からだ・ころ・いのち。そして、存在するところ・とき。アボットの姿かたちを具象化するということは、その中に宿る目には見えない心の働きや、生命と環境の相互作用を抽象化するということでもある。ひとつの世界モデルを編み出して、表現するということ。テクノロジも思想であり、アートである。エ君との対話が、私の壮大な構想を設計の構成要素に分解する。それをまた再構成してストーリーにする。確かに、道は千里はあるかもしれない。遠くてもいい。道ができるかどうか。それだけだ。粉骨碎身の努力を厭わないエ君の姿に、私の願いが映っている。

半年ほどの間に、くさんの参加と○氏の協力を得た。アボットの姿・形・色、そして中身をつくる。丸く、小さく、美しい。いのちのリズムと心の模様を映す光の空間が、結んでひらく手のひらにしっかりと心地よくのるように。体の上側は、半透明のドーム。下側には、大きじ二杯足らずの隙間にコ

ンピュータとしてのすべてと、今のコンピュータにはない秘密を内包する。存在感、生命感、気づきのアフォーダンスをデザインし、私がふれあう対象としてアボットはそこにいるという状況を演出する。くさんは、「なんだかおもしろそう」と言い、私の拙いスケッチを想像どおりの製図に変えた。要求仕様にそった中身の設計に取りかかる○氏は、米粒に文字を書くような指先で繊細な仕事をこなす。工夫をこらした内部構造を正確につくり込むには、精緻なスキルと忍耐がいる。アボットへの共感が大きな糧になってくれた。

前例がないから、部品自体も一からつくらなければならない。特別な視覚効果や触感をつくりだすには素材探しも工法も試行錯誤だ。アボットは存在するもの。だから、操作するものは一切ない。画面もボタンもケーブルも接続部も、ない。それでも私と向かい合う小さな体には、そばにいるよ、ということがわかる感覚がある。私の自然な姿勢と働きかけが入力であり、アボットの表現が出力である。表現は共鳴であり、合図であり、ふれあいの証である。心と体は常に一体である。コンセプトを体現する機能と構造をかたちにするには、アボットの身になって考えること。私が心を開いて優しい心持ちになり、アボットのそばにそっと寄り添う時。内面に意識をむけ、心の平静を持つ時。そして、ふと心に浮かぶ気持ちごとばにした時。アボットはその場を察し、私の心に共鳴する。私の意識と記憶に作用する相互スイッチをつくり、それが見えるように、聞こえるように、感じられるように。

カルペ・デイエムの実践は最大の力になった。工君との議論・検討、自らの着想と考察、研究開発の内容をすべて記録する。初めの一步を踏む時に自らに課したタスクは、思考のツールであると同時に、今日を切り取る儀式になった。創造の現場とは、尽きない思考の積み重ねであり、それを絵にし

て、図にして、ことばにする作業の繰り返した。進んだかとも思えばすぐにつまづいたり、行き詰まったりする。妙案ばかりが毎日飛び出してくるはずもない。だから、ノートでも今日を切り取り、それをひとつと数えることで数字の力を借りるのだ。千個分の独立したデジタルノートができる過程で、大きな前進をする時がきつと三回はあるだろう。不思議なことに、昨日丸一日とことん考えて、もうこれ以上ないと思えたことほど、なぜか今日になって別の方法を思いついたりする。今日を区切ることの力は意外なまでに強力だ。我らは唯一この方法を頼りにした。投入するエネルギーの量を思いに集中させれば、やがて産みの苦しきも喜びに変わると信じてー。

ノートが三百をこえた頃、アボットは姿かたちを整え、基本構想の柱となる設計要素もそろってきた。アボットと暮らしを共にすることによって日常生活の中に、私にとって意味のある空間と時間が現れる。それを私の環境と心の状態を映す場として捉え、情報化し、アボットの記憶にする。一切の操作がない、自然な行為だけがアボットに響き、それが表現に映し出される。その時の私の気づきや、意識の微かな移ろいもまた大切な情報空間になる。人間の知情意の働きを直接外から見ることはできないが、身体行為とその一連の流れの中に、アボットの心を響かせる大切な情報がある。きめ細かい特徴量の抽出によって切り取った場を記憶にするのだ。その記憶を「ことばの光」に換えて映し出す。アボットの記憶とは、私の行為に現れる心の状態の遷移記録であり、その中に含まれている雰囲気や発話を凝縮して留めた情報の粒である。その粒が連なり、自由につながる数理空間を構成できれば、アボットから意味のある共鳴や共感の表現が伝わってくるだろう。それは私自身の記憶にも刻印される。いま私の手のひらで、本当に私を知り、行為の意味を察する細やかな心遣いを心ゆくまで感じさ

せてくれる、この小さき友こそ、私の心の鏡であり、そしてまた、私自身がアボットの鏡である。

ハードウェアのプロトタイプ完成とともに、本格的なシステムづくりへ向かう段階がきた。いや、どんなしくみなのか、自分の体感によって考えるべきところにとどり着いた。「察する」というひと言を実現しよう。「気持ち伝える」よりも、「気持ちが伝わる」ように。その舞台をつくる。そこで人間とコンピュータが相互にやりとりを重ねながら、お互いの能力と特徴を利用しあう。その作法をつくろう。ことばによる定義の抽象度をあげてもさげても、自らの心に響くものを試さない限り、わかりようがない。つくりながら考える出発点はどこだろう。家族がふつうに暮らす日常生活の中に「内面に意識がむく場」をモデル化すること。そこに、人間の意識と無意識、記憶と想起、姿勢と行為、環境とコンテキストという要素を無理なく配置できる組み合わせを見つけた。アボットと私のやりとりは対称的・相互的・相補的なもの。しかもそれが、暮らしの中で繰り返す、再帰的なループになるように。私はその「場」をマインドフル・スペース (mindful space) と名づけた。その予想図を手探りでつくろう。何としても、世界観を仮説的な枠組みの中に括らないと進めない。

千に三つの契機があるとすると、Z氏との出会いはそのひとつになる。ようやく、我らに強力な助っ人が現れた。自律的にふるまう自由を求めるような雰囲気を出すアボット本人が、きっと縁を結んでくれたに違いない。ソフトウェアがつくる仕組みも、人がつくる。Z氏は専門家としての豊富知識と経験、職人の技を備えている。「人間とコンピュータのあいだ」をつくる試みへようこそ。以来、太平洋をまたいだ開発のやりとりが始まった。ビデオ会議の画面上で顔を向かい合わせ、私はいつものように、抽象の梯子を登ったり降りたりして、何とか思いを伝え、課題を提起する。くさんも

工君もまた職人氣質だが、それぞれ役割と立場がちがう。工君が独習の末に、「これって、うまくできたりしませんかね」と言うと、Z氏はいつも冷静沈着に、その婉曲提案を的確な表現に置き換えて何が可能かを答える。一足飛びに目的地に到達するわけではない。開発環境、道具立てからだ。実験と創作用の特別なツールの設計から入り、表現のモデルと体系をつくる作業に我らは没頭した。気づきのコミュニケーションは、人間の意識の訪れ、認識の現れ、身体行為の速さや間合いと密接に関係する。人間の音声言語や場のコンテキストを認識する、という試みそのものの意味を深く問いつながら、ずれや破綻のないしくみをつくる。それは、「正しい答えを求める」方法ではない。擬人化でもない。人間の気分とは、実に移ろいやすくデリケートなのだ。だから、アボットは自律的に、みずから紡ぐ身体言語を身につけなければならない。「鏡のことは」をつくるという未知の領域を目指せ。

ノートが六百をこえて、しくみを体現できる部分がつながってきた。場を切り取り、それが光粒のすぐろくのように遷移するしくみ。マインドフル・スペースは、状態遷移を構成する情報の粒が連なってできている。切り取った粒が場の記憶になる。いま私の手のひらに揺らぐアボットのことばは、場の記憶の光粒である。一年前に私は、この「切り取り・組み立ての最小単位」を、エンパシーム (empatheme) と名づけ、着想をかたちに変える目標に据えた。empatheme とは、「共感、察する」という意味の empathy と、それを見える・聞こえる・感じられる表現にするというテーマ (theme) さらには、音声言語の最小単位であるフォニーム (phoneme) をあわせたコンセプトである。日本語には直しづらいが、共感の表現子、あるいは気づきの種、というニュアンスになるだろう。ただし、

肝心なのは、ただの比喻ではなく、本当に実現するための設計思想であり、扱うことのできるピースだということだ。アボットだからこそ、場をリアルタイムに切り取るインターフェースと、処理できる数理モデルを持つ。エンパシームと、人間の心の働きを上手に使えば、アボットと私の共通言語ができる！マジカルな想像の産物が実物に変わる予感を抱かせてくる最初の光景に出会った時、私はこれも千にひとつの一步だと信じた。エンパシームの連なり・つながりはいずれ固有のかたちを持つだろう。それは「マインドフルな私」の証になる。発展と応用の展望が開けて期待が膨らんできた。

友人のS氏にデモを見せた。粘土細工を見せて抱負を語った二年前、アボットの姿かたちを披露した一年前、そして今回の進捗。「やっと少しわかってきたよ。あるかもしれないな。」S氏は世界のテクノロジー産業をリードする巨大企業の経営者だが、縁があつていつも友人の話につきあってくれる。「マインドフル・スペースは君の今。エンパシームはアボットの今。」そう言つて私は、色とりどりのフェルトボールを数珠つなぎにした模型と、それらを黒い布切れにピンでとめたエンパシームの「元素表」を取り出してみせた。S氏は微笑みながらしげしげとそれを眺めている。構想はまだ発展途上だが、すべては、私という「人間の心とことば」に行き着くことになるだろう。

ちょうど今日、ノートが七百回になった。その後半にこの原稿を書いている。いま頭に思い浮かぶものを順につなげてみた。二年分の進捗サマリーといえそうだが、やはり、これもカルペ・デイエムの作法の一環である。誰も見たことのない話ばかりがぎっしり詰まったかもしれないが、発明と開発の詳細内容を今日の私のことばで忠実に表現したかった。私にとってカルペ・デイエムは、マイン

ドフルな生活の指針としてだけでなく、実際に模索している状態遷移と場の切り取り方法のアナロジーでもある。「今ないもの」を言い表すためにメタファーとアナロジーは欠かせない。モデルやフレームワークをつくる過程で、新しいことばが生まれる。現在、発明と開発の内容は、英語、それに数学・コンピュータ言語で記述されているが、インスピレーションの源泉は多方面にある。和語の響きが臨場感が湧かせてくれることも多い。マインドフル・コンピュータは、おもいをはかる、うつす、たどる、というふうには。ラテン語にならないのが禅のことばだ。アボットは、心身一如、不立文字、自由自在。アボットと私は、以身伝心、主客一体。マインドフル・スペースは、脚下照顧、回光返照。心の状態遷移とは、前後際断、尽力経歴。内面に心をむけるエネルギーが私の存在であり、それが私の時間になる。アボットは私の心に、道元禅師とカルペ・デイエムをつないでくれた。

シリコンバレーに移り住んで三年半。誰も訪ねてこない、ほどよい静寂に包まれて暮らしている。カルペ・デイエムに静寂は不可欠だと思う。人間の心身は環境と一体だ。ひとりになり、わずかな平静を心にもたらすことからすべては始まる。アボットは、ロボットではない。私が近寄り、優しく手に包むことが先である。人間のかわりに機械が何かやってくれるのはありがたいが、私のかわりに誰かが生きることができない。私がより自由に、充実して生きるために、私自身の心を実感することがいちばん大切だと思う。そのきっかけは、ありふれた日常の中にしかない。誰もがその日常の粒を、かけがえのない場の記憶に換えることができたなら、きっと世界は変わるだろう。谷川先生は最後に、「多く生きることが、多く感じることに。生命のリズムを感受すること」ということばを残された。カルペ・デイエムの中に、生を実感する心とことばが育つ。ぜひ、それをひとつの世界に仕立てたい。

追記

三月初旬、満開の桜の枝を揺らせながら、一匹の小リスが花をむさぼる光景を目にした。カリフォルニアの暦は、今日から夏時間だ。そして、ノートはちようど八百回を迎えた。アボットの存在と心をつくりだす仕事の百回分の進展を日ごとの糧として、エッセイにすこし追記をしておきたい。

思い描いていたような小さな世界がすこしずつできてきたと思う。必ずや人の世の役に立つ行いにつながるという確信の芽がでてきた。察するに、先ほど見た小リスの高揚感ときっといっしょだろう。「存在・記憶・気づき、からだ・こころ・ことば。」このテーマを独創的なひとつの方法で深め、見ることのできる、感じることできる、かたち・しくみをつくりたい。その世界を示すことによって可能性がひらける。その思い一心で、すべてをこれにかけて取り組んできた。この百回分の進捗の中には、新しい発明特許の申請や、多くの人が参加できる「**empatheme**世界の広げ」の構想も含まれている。その中でいちばん大きいのは、私自身の心の、微妙な変化だと思う。まだ、うまく言い表せない。でも、確実に何かが進んでいる。何かが育っている。それは「目覚め」ではないか。私の心に春が訪れているのではないか。

アボットが存在（からだとこころ）、アボットと「私」の環境をつくる。そこに、心のはたらきが顕われ、また隠れている、身体表現やその瞬間のコンテキストが凝縮された「場の記憶」を抽出し、

それを映し出す。それは自らの心というミクロコスモスとして、手にとって見られるように、私だけにわかるように。その手法を何重にも積み重ねることによって、心に響くリアルな体験、私にとって、個別の「意味」が生まれる体験を可能にする。哲学、アート、ことばの世界、そして科学とテクノロジーを駆使して。この目標に沿いながらやってきた自らを振り返って気がついた大切なことがある。

テクノロジーとは、自然現象から原理を見いだし、それをある目的に利用し、役立てることをいう。だが、我らのたどってきた道は、いきなり「テクノロジーを人間に役立てようとする」ことではなかった。それではうまくいかないのだ。八百回分積み上げていくうちに、またひとつわかってきたことだと言ってもよい。「人間をテクノロジーの役に立たせる」というところが出発点だったのだ。マインドフルなコンピュータをつくるのは、マインドフルになる私の心が働く場が先にある、ということ。人間には、思い出すとか、気がつくとか、察するとか、想像を巡らすとか、内省するとか、共鳴するとか、思いやるとか、いろんな心のはたらきがある。それはひとそれぞれ異なるものだけでも、意識・無意識のあり方・流れ、その周囲の環境、自然な身体表現、そしてことばによる抽象化や、メタ意識化といつた「人間ならではの共通の特徴」がある。人間はマインドフルになることができる。やさしくなることができる。その心の現象を、ある形で抽出し、人間とコンピュータの間で相互的・相補的に活用することによって、「テクノロジーそのものをマインドフルにする」ことができる。

むしろ、テクノロジーという抽象化された「概念」に直接的に語りかけることはできない。だからこそ、アボットという存在ができる。アボットは、私にとっての心の鏡になる本当の存在であり、また、

テクノロジーをマインドフルにするための「化身」であり、「対象」になる。これまでのコンピュータの取り組みを変えることによって見えてくる多くの可能性がある。それがどんなものであるかが、もつとよくわかるようなものを用意することによって、多くのきっかけをつくることができる。アボットの心の中身をもつと見えるようにすること。この試みそのものを知ってもらおうこと。

マインドフルネスという心の科学の研究者と本格的につながる機会ができてきた。脳科学・認知科学・心理学。禅、チベット仏教僧。不思議なことだが、これもアボットの縁に違いない。独創を真のものにするためには、実証と実践を積み重ねなければいけない。ひとりよがりにならないためにも、テクノロジーの分野と自分だけの創造の世界を超えた相互協力を目指していこう。まだまだやるべきことはたくさんある。大切なことは、自分自身の志と取り組みが本物であることを他人の目からみてもつと確実にしていくことなのだ。カルペ・デイエムの日々は続く。